椿説弓張月　前編巻之三

鎮西八郎
爲朝外傳　椿説弓張月前篇　巻之三

東都　曲亭主人編次

紀平治計を献ず地理を説
寧王女芋を饋ず寃苦を告

第六回

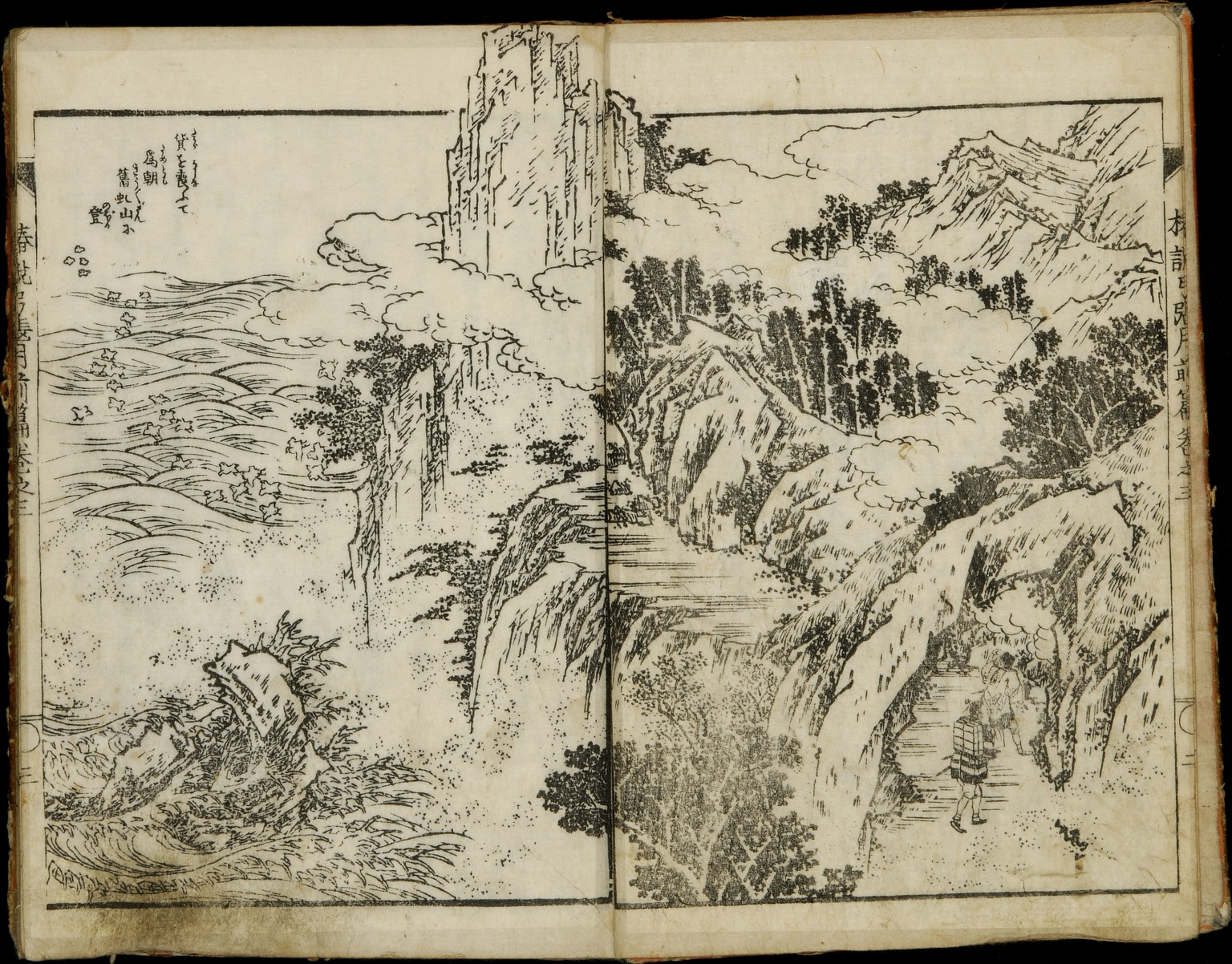
爲朝ハ路ぶ。彼國の言語とよく紀平治と同諦らめ薩摩灣沖の小嶋より便船順風ふ真帆揚てゝ七日あまり琉球へ渡海ひたり。さて主從ハ日本の商旅ふ行まぢ。旅館ふ歌ひ彼鶴の往方を伺定んと志まふよ志わるりの絶ゝ〻ふ〻かゝてゐ徒ふ日數ゆ経て。

遯逅ふ逢つるひもあれど。只管愁ひ悶まくり。志るよ有一朝爲朝主徒起出ゝえまふまゝ。まりゝ巻涓練のさゞひ悉矢ゝりゝふ文ふ弱るさこ。こハ盗賊の所為ふゝ人ふいづちより入りゝんと疑ひまゝひつ。彼

椙山女学園大学図書館蔵

此を入りまふ。さて入りとおぼしき処もなく。あまり不審
られば店官人を呼び。きたぐのよしを告ぐ。人店官いふやう。こゝより西南
よあり。て舊虹山といふ穹谷あり。見則花瓶嶼と雞籠嶼との中央に
山中に曚雲國師といふ一人の道士在をり。この神仙よく人の爲に
禍福吉凶を說ふ。饗の物を應ずるごとくをり。國王これを尊敬
欲とおぼしきものあるよ。況ん忽地術をもて
きまふるの斜めなるを彼曚雲國師に。山に登り叩首て齋戒沐浴して
これを取りまふるのあり。そのとられるもの又逆しのふぞといふる國王の
乞求まことに偶うけ切せまつるもあり。
尊信しまふ道士ふ在ばこれを訴へるひとびと。駿の損をしたのこ
きられども聊も恨るところあれば。その人うるのふで崇あり。おりふしの財物
を失ひ。もこの曚雲國師が戲ふかんしまふるんとり復さんとおもひ。

さきに舊虹山へ赴きまくといふ爲朝なまひ。て況ん五分の憤あれども。
こまふも見しまふ。きたぐ。きたふば彼山へ行くに。乞求なんとてようへいうざりの路程
そこに問まふ。一日の中ふ輒く到るべしとて。審に說示せしまふ爲朝へ
紀平治を携へ。旅館を立出舊虹山へ赴きまふ。爲朝琉球にありそ彼國
球の言語を用ひまふ。きたれども讀まふ。琉人と問答まふ。
らへしまふれば悉本邦の言語をしまふこれを記せり。爲朝主從ふ足に信せまくいそぎまふ
極に既に彼処に到りまふ。山の半腹まで登りまふ。この山西南ふ海に
峯尖く溪深く。松柏森然として晝さへ暗きふ忽地曚曨として霧
起る。只野干玉の烏夜のごとく。一歩の先もつへえてそこへ彼曚雲國師が術
をしまふ。この霧を起して。徒を遮り留まふやとおぼしきふ只管憤りて。堪
主從声を御導まふ。巖に伝ひ松枝に探よりて登りまふ
まふに。爲朝岸破て踏外して。數百丈の谷底へ真逆さまふ落ふ。紀平


貨を喪ふて
爲朝
舊虬山ホ
登

治へまとし前にうちおきしかバ。このものをもて為朝ハ器械とりてハ早業の手煅煉にてよく七人の屏風を飛踰ゆれども。今もて屹しきすふかく、れ娯ちひられバ落るしに。株ふて瞎を打ちぞし息倒て在しるに。忽地女子の声して。こハわが珠に似たりと。よく〳〵わが珠に似さるといふが。不圖耳に入りしかバ。身を起しつゝ見かへりたるに。年紀ハ十七八なる婦人と。十四五歳なる女童と。わが懐にしける珠を取りていとうれしげなる容色なれバ。忙しく走りよりて。そハわが秘蔵せる珠なりし。返しまへと宣ふを女童ハ返さじとて走り退ぬ。婦人ハこれをみてうち笑ひけり為朝に對ひ。やよ日本人よ。願くハこの珠をこの子に与へ給へ。祈りいでたるは怪しくもおもはんずれど。縁故をきかせ侍るべし。何か匿ん。この少女ハこの國の主尚寧王の中城なり春宮の寧王女にておはしますぞ。こハ則この王女が産せ給ひし。廉夫人といふもののあるが。中婦君なるその妬ふかくして。あやしき讒言し。剌朦雲國師といふ道士を相語らひ。この王女の位を他人に譲らんと、久後にいたりて國乱れなんといはせし程に。王も心迷ひ疑ひて没しのびて。さるに往古太平山の前の海に一ッの虬ありて。常に風雨を起し洪波を揚し。五穀を損ひ洲民を害しけるゆゑ、これハ先王ふかく愁ひて天地に祈禱し。ついに潮に浸て彼虬を殺し。是を縊架山の東麓に埋めらる。今の舊虬山是なりとぞ。先王虬を殺したまひしにその腮を裂て二顆の珠を得たまひしが。その珠一顆を琉といひ。又一顆を球といふ。されハこの國を流虬と名づけし虬を切流しぬるにより起りて、又琉球と書るハ彼二顆の珠を表せる。この珠代々の王に傳へて中華傳國の玉璽にひとし。元来この國の風俗にて。王子おはしまさざれバ王女に

皇女廉夫人
珠を爲朝に授ける

位を傳へんとの寧王女前年中城ふるふ時尚寧王すつ彼珠を領ひしふいく祖もなく彼珠一顆ぞ失ふるかる神宝の故るく失ゐんもいく怪し足疑べくもあさ中婦君の妬ふ彼曚雲國師ふ盗せるくとへ精しゐぐふ證据るればいひとくみ通ゐく畏けまで王も又ゐこ紛ふうふ在まをりく終ふことを曉得ゐつこ忽地中城を廢しく癈人とるしふはともみとの処ふ棄ふてくれで。ありし昔ふうりゆく朝の山のきくふ雲も住くくづ記都を隔流つなしこ空蟬のつゐ刃の秋をうこちつ。きくふあるゆ三歳ふおよびるゆ坊ゐのもまん風の外ハあくしやホづくしの果ハ磯うつ浪の音ふ渡ゑこびしこさつゐ宿の掃もちくゐぬ庭面へ物の落る響せしふ驚こ走り出くゐんけれ。この國の人もおぼえぬゐ昏絶くありつるハこハ交易のゐふ渡海せし日本人よこゐうふ貯りてる藥ゐんどのありやすると立よりて

ゆゐう懷をうい探るふゐひもうけぬこの珠あり今熟視けるふ往ふ王女れ先ひゐんふ一顆の珠ふ露こゐつそよしこの珠ふあるそもかくくゐ似れバこれを持く都ふ上り王女を宮中へ選しこ入ゑまくせこふつも又年系の寛屈を脱べくしゆゐるありてハ一顆の珠ゐりこれる于てハ千乘の位ふ擕る圭こやかく審ふゆえけるとハすげくくふるけるせてよとかこ口説つも求ゆ更ふ逆こぐこ。まこゐりれば鳥朝数回歎息しすづこいの二人の女子をえこゐふ形容こそいこ嘆これ物いひぶゆも風流こるふ彼少女の氣高くく平人ゐらでおぼせしハ今この珠をゐんく望を稱得こせぐやくく。こぐくく沈吟こゐひ。又ゐひえくく宜ふゆう彼珠を。こが本國ふてけるこりのふくく求ゐこ玉金くゆんゐていは精しゐぐく

それは日本の商人どもこの國に需むるものありて。夥の貨を積て渡海せしに。前夜矇雲といふ悪道士に奪ひ去れ。足ずりして復さんとて彼首の山へ登りしに。如此くのところとの処へ転堕して。介抱をうけて今その珠も又惜むに足らねど。その貨へ多き先ひとくその珠只一顆あるを。これを人々汝才に進らせなば。何をもてその索るものと換ゆべきとさとく返しまゐらしと宣へば。廉夫人聞て寧王女が都に在さば。何ぞそれ汝才が求むるものを与へさせまゐらんもいと易けれど。今は一塊の土ありとも。私のすまへ投うちがくし一梳の櫛ありしも。私には旅しまふてるなげもさらに珠ぶに換ぬ人なきを。國王に奏し聞え汝才が志を称へし。すべて試に索るものを為させ給へ。かくいふ為朝は。そが索るものはこの國に産物にあらず。されど日本にありける日。一隻の鶴を放せし。足に黄金の牌を著けり。これを放て後又が天皇彼鶴を召進らすべしと勅ありしかば。そのころ頃放遣しかと陳せしも云備なかりしかば。許ありて。これを陰陽師に問へば。鶴は今琉球國におりといふよりて。数百里波濤を凌ぎて。やうやく渡り来つれども。いまだ鶴を得ずゆえ却て貨を失へる薄命を汝才の人にぞひとつべくまゐらしと宣ふに。廉夫人も寧王女もこれを聞てふかく喜び。ふと志は奇しきこともあらんがなる今朝しもそが庭へ一隻の鶴のおりしが。よく人に馴て追へども飛去ず。見ればこれもこれ黄金の牌を著けり。その容全く他國より来るものとおぼしければ。茹に養て今見るに。彼首にありし汝才が尋る鶴はこれにやあらんといひつつ。忙しく裡面に走り入り。王女手もまで撓げる扛りくさところを見れば。まがふべくもあらぬ彼鶴なり。あな嬉し。ありし為朝ふかく喜びおぼしこれなりく。それ汝ありく来れとも終に索得ず。今汝なく

鶴をうることそうれ〳〵。今彼珠をうりて鶴を換んよりも固辭するは。珠は既に
ゆがみあり。さゝば鶴をあらんといひもあへぬに立よりて茹るゝ
これを脅員立えんとすゝまを廉夫人引とゞめ〳〵。今こゝ王女おりなども
珠を行〳〵都へ入りのぐりまふこと。こゝ王女が賜るゆゑこのまゝ返さんも
本意なし。あるは且〳〵逗留し〳〵王女の發跡まをまちその酬謝せ
受んやといへば爲朝頭を左右にふりこれ今鶴を行〳〵歸ル矢の如
し。明日國を異にすべしいくゝも今日驩を存〳〵するゆゑ自他の大幸なり報
恩を受〳〵ふ及ばずといひをり。東を望〳〵立出るかゝ〳〵爲朝は路
十町あまりも送〳〵おくりをせ〳〵と流。後方より只管追ぶるのあり。
誰ととえうるゆゑ彼王女なりその時寧王女はやちゝ走りより。
ゆこの國の案内をばよゝもとゝとえるゆゑ。こゝより東南二三十里ばかり

海濱ゆ〳〵人家あり。路ゆ餓なばいふゆせんこをりくゆさゝゆ人と
仰〳〵飯とおぼし〳〵桐の葉ゆ裹ゝる紙ゆ出〳〵ゆ爲朝を
その好意をよろこびやめえこれを受ゝ懷よ志あるは王女又宮ゆ
いつゝ〳〵れ才を相ゆ高人の容ゝあゝゆ實は勇ゝ親雲上武士のゝ
あゝ〳〵あゝ〳〵。時ゆあつゝ〳〵かゝ寡〳〵あゝゆるゝ國ゝ山田ゝ
人ゝ〳〵宜へば爲朝潛ゆその俊才を驚嘆〳〵れ全くゝるのゝ
ゆ日本あるは父もあり。縱この國ゆ留り〳〵富貴を受ゝも父母
國ゆあり〳〵貪ゝあは志ゝゆ。と回答あるは王女ゝ〳〵ゝ志ゝは吾才を
も日本へ行〳〵ゆりあるんや吾才今珠を行〳〵都へのぼれば福ゝ似て却
て禍を招〳〵ゆ似〳〵。故いゝゆとゝるれば中婦君姬ゆ〳〵在ゝ〳〵れを憎
まゝゆ甚〳〵。それゝあゝゆ。ゝゝ父王曚雲國師ゝ述ゝ〳〵。國の費と顧

寧王女
平沙よ
鳥朝を
送れ

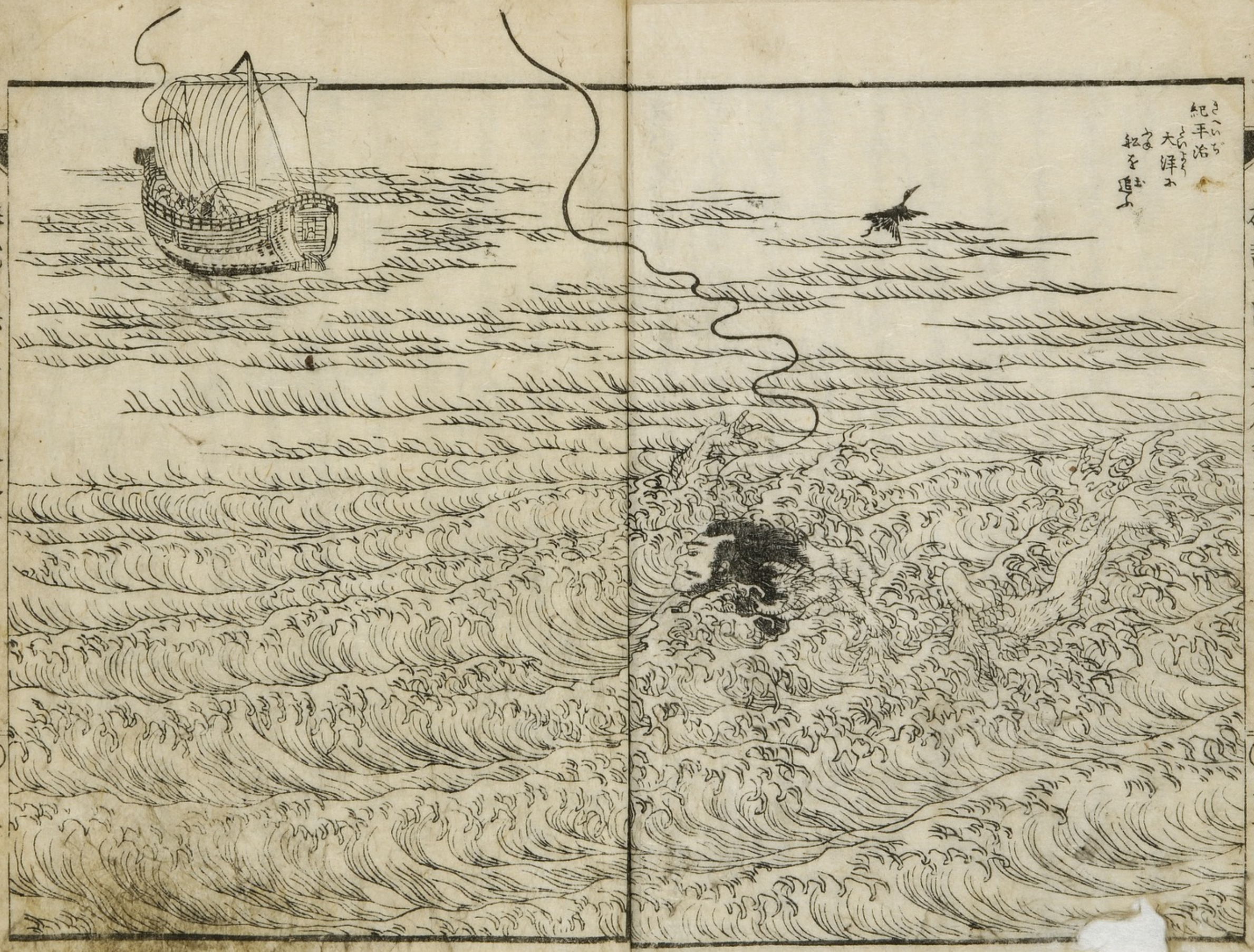
のゝ子を加之彼珠を。ゐ失ひつる珠も定めがたきなり。その珠あらざるとも紀八父を欺き身の罪を贖るあり。又これをうけ引ざる時八母の志を悼れなり。こゝをもつてこの國ゑ住果んゑをねがゝ。華人の世言ゑも小人罪みり。王を抱く罪ありといへるゑ。是こゝろうへとそと宜へ八爲朝まんく感激。宮ゑとゝろ理ゑあれと中婦君こそ憎しとゝもおぼさゝ大王そいゝく父子の恩愛在さらんとそ。こゝ八王女のゝりまへるゝまゝいひこゝらくまゝ折しも彼廉夫人尋来てこゝ八王女こゝゑ在せし。紀帰京の首途も暫あさての頃ゑんゑなりて漫行しまゝてさくゆりまへとゝ。こゝろるく誘引まゝふる間ゑ爲朝いそと其処を去り去り。いよ〳〵路をいそぎまゝゑ王女の教まひしゝ。いけども家もるく。只荒〳〵そる平沙ゑあり。日も中向暮そして夕飯ゑ〳〵まへゝ。ゑゝめるる石ゑ尻をうけ〳〵向ゑ貫ゐ〳〵。裏飯を打ゑまゑゑ。ゑ故ゑあゝで。日本ゑ八いそ〳〵こゝもちぬ蒸こゝ芋なりこれを食まへゝそ。その実黄ゑ〳〵味いと甘し。二ツ三ツゑ〳〵既ゑ腹ゑ満ぬ後世この芋薩州ゑ渡り。世ゑ琉球芋と稱ゑるハこれるゝ〳〵。按ゑるゑ琉球芋（薩摩芋と稱ゑ。當初薩州ゑ種を蒔れゝ）東埔塞瓜（小ゐるを唐茄子とゐふ）の二種近来本邦ゑ〳〵種こゝ下賤のゝの菜一の菜蔬こゝて婦人たこれを嚙む。又荒年ゑ八粮ゑ當ゝこれを食ゑ毒ゑ。但琉球芋ゑ八墨を忌東埔塞瓜ゑ胡椒を忌といふ世人琉球芋ゑ墨を忌ゑを忌ゑ。そいまゝ東埔塞瓜ゑ胡椒を忌ゑいそゝて談今こゝゑ及ぶのゝ亦是仏者の老婆心のゝ。

第七回

紀平治舩を逐ゝ鐵丸を飛を
野加世馬を駿〳〵桿棒を嚼む

鎮西八郎爲朝ハ寧王女母子をとりるゝ〻こゝまて東を浦づゝひて只管走りるひつ。その日も既に暮めとて。ひいそゝ〻れハ通夜路をさせゝ。今ハ二三十里も来つゝとおぼしきこゝろ鷄明暁を告ゝ郷もや近つきぬ。おぼしきゝ極に不意もそゝめ船を岩ゝ浦に生るひつ。この時天ハ明そゝれ一艘の船追風よろゝきとて纜を解ありり。これあん嚮に便船きつる日本船なりゝ〻ぶ。ひるふゝ〻よろこびおぼしてゝぎてその船に乗うつゝんと志まひゝ〻ぶ。されるゝも紀平治ハいかゝきつゝん彼を棄ゝ〻ひんも義にとゞりさるとハ思ひてこの船に後ゝるゝハ速ゝハ帰ゝし。とやせすゝかゝやせよゝと志ゝ〻ゝ躊躇ゝく在せゝいるゝく愁に紀平治をまちゝ。この船に後ゝ限りある日數をゝこさハ父の存亡も量ゝ〻紀平治ハこの國に訓るゝものゝ縦棄おくゝもゝ〻ゝ素ゝるゝゝあゝゝゝとゝ

そひ久ゝ直に船に乗りるゝ人ハ忽地帆を張舵をとり東北を望ゝ上ゝらせる。不題八町礫紀平治ハ舊虬山ゝ主君を乞うゝるひ鷲こゝゝとゝひゝ彼此を索ゝ〻せつゝ。ゝゝゝ逢ゝ〻ゝ。むゝ〻ゝ旅館に立ゝ〻ゝ。夜ゝ〻ゝ待ゝ〻ゝ。終ゝ〻ゝ安ゝ〻ゝ。ゝゝゝ主從の便船きつゝ船いとの曉に纜を解ゝ〻ゝ。ゝる旅館を退出ゝるれゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ夜も向明とゝるゝこゝ。湊のゝゝに立出ゝ。只見れハ今出る船の中に古曹司も在せゝハ吐嗟と走ゝてゝゝゝ。船ハ既に磯をゝるれ十反ゝゝ知せゝ爲朝も又遥に紀平治をゝ人ゝるゝハゝゝ。彼ハこゝに伴の男ゝゝ。この船ゝゝゝ。槽戻ゝてゝと宜へハ。紀平治も磯方にゝゝ。この船に乗ゝ〻ゝ。風のまゝゝ走り帆をいゝで輙く帰ゝゝゝ。船人ハきゝゝゝ顔ゝゝ。いゝゝ遠くなりゝゝゝ。


きへいぢ
紀平治
たいよう
大洋を
こえ
越を
追ふ

爲朝もせんすべなくて、ぶるぶる足えまふ。紀平治は蹉跎として、異國の鄉導ふ擇まるべし。如何せんと、日本へ却へ去らんとすれども、何の面目ありてか、ふたゝび日本へ却へ去らんと、いそ追つかんと、衣服を脱ぎ頭ふ棒漫として、大洋へ身を跳らせ、飛入りぬ。元来その身西海ふ人となりて、よく水戯を得たりしが、瀬ふ寄る亀ふ異ならず、浮きつ沈みつ泅ぐ程ふ、彼船ふ近よるまで、高浪逆波ふ隔られ、潮ふやられて左右ふ泅つくへもあらぬ。爲朝いとの光景を見て、あれ助よと焦燥めども、鎮西八郎といふものは、船人ふ名を匿して、渡海のひつたべれば、加旃大洋を走る船人といへども、その進退を知ふまじとて、紀平治を、殺さんと、岡の上ふ折しも、紀平治は豫て、時の爲ふと、身を放さんとすれども、鐵丸ふ数十丈の緒を著て泅ぎ、積鳧禪の間より拔出して、左手ふ浪を切り、右手を高く擧て、彼鐵丸を投つるふ、緒の端は手首ふ、ふたまり、鐵丸は過て、船の中へ礮と、入るを爲朝丁と受て、ちづるふ、緒よせるふ、紀平治は、勞せずして、やぐて船ふ跳あがれば、爲朝もまた、安堵して、且感じ且悅び、今こそ八町礫の綽号、虛しからぬを、ちりつまて、嘆賞あり。彼鶴を、ふりしぼる、又俄頃ふ、船の上ふ、己れを得ずして、かくは、せ、密ふ、ゆえ、紀平治も、ちをうへ、限りなく、よろこび、舊虬山より後の、ものは、なくて、紀平治、形勢ふ舌を掉して、北國の人を、よく馬ふ乘、西海の人は、よく水ふ戯る、とはいへど、かくまで、水戯ふ妙なる人は、いまだ、及ばず、と、感歎して、琉球國禍乱、よりて、諸國の交易を止めしこの、ちは、日本人も、渡海する、

りのみなりしとぞ。彼国の興敗ハ審に後篇に出 間話休題宰府にハ為朝南渡のゝち。たえて音耗なければ。忠国白縫ハさらなり。嶋の家隷とも。心ならず安からず。或ハ海神に祈請し。或ハ土地に幣帛献て。只願速にかへり来ませとのみ願の外他事なし。洛なるも為義朝臣なんど。早馬をはせて帰国の有無を問せ給ふ使者の往来。櫛の歯を挽がごとくなれども。翌をまちて儚見まてハ出なきより。既に三箇月に及び。百日の限も十といひて五日になるまで。徒に日数をうちすぐれバ。労しく切なりしとぞ。かくて九月もはや尽けれど。大洋数百里を隔たる他の国の音耗を傾致すべき手づるもあらねば。詰なに濱壇の望子連忙しく走り来て。御曹司の船恙なく着岸ましましたりと報知せるにぞ。衆皆悦める事草木の甘雨にあへるがごとく。忽地に勇たちて。士卒ハ迎まゐらせんために馬を牽轎を扛せて浦方に走り

ゆき。白縫ハ衣服を更席をうちはらひて待ほどに。且くして為朝ハ町礫紀平治以下。嶋の士卒を將て。彼鶴を扛擡せ。馬の足搔をとゞめてかへり玉へバ。阿曽忠国も衡門の外まで出むかへ。恙なき帰国を祝してもろともに正廰に至れバ。白縫忙しく立出て。よろこびを述る間に。紀平治が妻の八代。花麗に打扮て。銚子土器をもちて出たり。すべてこの日の歓會。そのさまいふも更なり。詳にいはゞ言語にあまり書つくすべからず。なれバ略しつかくべし。さて為朝ハ衆人に對ひて。われ苟も君父の幸福に因て。風濤の難もなく。異邦に往来して。容易鶴を得たるハ。君へバ往に雷死せし乳母子須藤季重が賜なりし。その故ハ如此と。て珠をかけて鶴に換しハ。曚雲国師が幻術。寧王女廉夫人の薄命。紀平治が水戯に至るまで。おちもなく物がたりまへバ。衆皆駭然として

耳を側てゝ感激斜めならず。其が中ふも八代ハ夫がことなさ舉動を笑ゝいと娯氣ようえゝり。る爲朝又宜つゝ院より定め下さ日一日数も今いくばくもあらぬふ父もさぞ待ぶ心ゝ〳〵おぼ
ちらめるれるふ直ふ上洛の首途ゝ〳〵先時もとゝ〳〵鶴を進ふるべう
おりふし。ちうれども駿の士卒を領ゝのゝ〳〵ばゝ略も果敢ちふまで却穏便ゝ
ざるべ〳〵因ゝ従ひ奴くべきハ透間主計悪七別當を取与次與三郎大
矢新三郎。越矢源太松浦次郎打ゝ紀八高間三郎以下九六七騎を限
ゝとせよ又紀平治ハ長途の疲労もあるべ〳〵ハ吉田兵衛高間四郎等
とゝもよ残ゝ留りめくと宜ハ是れハ。紀平治もとこと出〳〵禀ゝうれば〳〵豊
後より付添ちり〳〵ま〳〵帰洛ちまふゝる残り留らんゝ本意ようあ
らもゝ〳〵長途の疲労あゝハ君も又長途ようの疲労あハさゝんや畏ま

まと君の爲ようの粉骨を竭さんと欲まるの志ハ誰ようも劣ゝるべうもおぼえゝるべ。
只まゝ〳〵召俱〳〵ゝ〳〵れうゝと希ハ爲朝ゝち點頭ゝ汝ハいふ処理ゝり。
かゝまゝ〳〵いふを拒んもよゝ〳〵ゝ〳〵ばもの〳〵行装せよと仰ゝれば。ゝるう
けのゝりぬと回答ゝつ豫ゝ〳〵用意やゝるゝうゝん時をうつゝゝ待ゝと打扮つ。
廣庭ふ居ゝるゝ〳〵ゝり。當下爲朝ハ八代ようを酌をゝ〳〵せぬゝ〳〵ゝ三盃をゝふ
けゝ〳〵。忠國白縫ふ辞別〳〵。既ふ馬ふふゝんと志ゝ〳〵ハ彼野風と呼れる狼
庭門より走り出つ主の裳を令ゝ引ゝゝまゝ〳〵せ〳〵袖ようを馬ハこれる
駭ゝ怕ようを属強ゝゝ〳〵已ゝりゝる白縫遥ふこれをゝゝ〳〵忙〳〵ハ代ふゝ
やゝ。ゝ曹司ふゝる尽ゝ〳〵ゝるようの付りゝといふせゝ。ゝゝ〳〵様煩ようを立出ゝ
ハ只今野風ゝ光景をゝえ付ゝるようゝ。ゝとゝるゝ〳〵ゝゝ付ゝるゝり。ねゝゝ〳〵ゝゝのの
啓行を止ゝ〳〵。ゝゝゝゝ家隷をのゝゝ〳〵。鶴を進ゝ〳〵せまゝ〳〵しゝと真ゝゝて

為朝
鶴を
得く
洛り
よる

なれば忠國も又いかう。むつ一漢土三國の附呉の諸葛恪が畜れる犬を主の裳を曳くその禍あるをきせて國御堂関白の養せるひつる白狗が車の出前をふさぐ。路に咒詛の土器を埋むを報せしそもろ〳〵山雄がつるのみ〳〵忍合せまつべし。今こう女児のいる如く此度上洛あんあ山おほ〳〵吉少〳〵と諫れば烏朝含笑く。業山の言語故るこさるあふぐ。志ハあれど。今院宣を辱し。父〻年来の勘當を許されて洛へ上りめる矛の小事ふかつらひ〳〵止ざさえよ〳〵や洛ふ赴こさ〳〵首を白刃の下に喪ふも生涯不孝の子となんふ勝ぬ。いふ人の常言ふも怪をえ〳〵怪ぶれ。その怪散ぞ〳〵。ふ〳〵るゑ乙よとぞめるひそやづてつりまつるべ。それ野風を逐退よと焦燥るへ郎ふうけあまろり。一人ハ狼の首ふ鏃を繫ふ〳〵只管こゝを牽退んと。又一人ハ

棒をりて〳〵追遺ふんと致ぞ。野風ハるほ退ぞ〳〵て丈〳〵棒ふ噬つきつ。いと高やふ叫ぶ声腸を断ぞりるれば。人こる眉を頻げるも上洛あんふハようさるあふじとろふりの〻りり。白縫も八代も日来雄〳〵さふや耶ひりんりるゑ〳〵も留ひぞ。おるぞ乙を以ばえよ岩間の水を堰ねるふ持〳〵。袖濡さじ〳〵志ハ勵セぞもさのひ南海の逝けさるひを焦〳〵るハ洛へ旅ろ人のゆ〳〵す忍更ふ〻ほ川の〻るさ刃のよ〳〵あ〳〵ふもかくも一夜をそふ。とぞりふ胸ろ〳〵げふ〻ゑ〳〵〳〵ぶ烏朝呵〳〵ともち笑ひ男子一〳〵び家を去りてハ妻子を忘る〳〵ぞいふの禍福ハ天ふ係るりのをいとはさみ〳〵もゑるりのるゑといひ懲〳〵。内り〳〵馬ようち騎つ。鞭を鳴らして出るふ鳴呼悲さるる見やこの行〳〵ゑゑぬ主従妹夫の契も茲ふ絶んふ後ふぞりひ合されるる。

第八回

寶莊嚴院より御曹司強弓を示す
白河山中より八町礫別離を悲む

六條判官爲義朝臣ハ爲朝の放ける鶴を召進まゐらせ爲一院鳥羽上皇より定ゆ下されー日数も既よりふ翌よ迫りめるで。いまゞ紫より有無の音耗もあふざれば只顧憂悶ふ祈ふも忽地御曹司ふづふ彼鶴を携て上洛ー。六條堀川の館よ到ふひふ斜るふどよ流ふびおぼー。やゞて父子の對面を許ーふひふ。汝が此度の忠勤ハ往の過を補ふよ足ぬりと宜べ爲朝も恙なき尊顔を拝ーふ。よ流こゞふよりをやふふ見まれば。五年が程よりひーよりハ老ふたちまりさるを久ーふ遠ざりまゐせる君孝さよと悔ふふて漫ふ落涙しのひる。かくふ判官ふ時をうりゞ。鶴を扛擔せふ。院の御所よまゐり即それを進ふせーふ。近曾近衛院御悩あーまふふ日みふおりふせまをりふ。一院ハ鶴を御覧ぜふふいふも敢なよふふびのまゐもなふ。むふー義家が居多の寃魂追福のゐふふて放ふるりめを朕ぶ畜んもよふふ。それをバ放ふるせよと仰ふふ。やゞふふ鶴を放させまゐバ捕ハふふふび筋を生ふ。九霄よ飛揚ー。爲朝の苦辛忽地徒ふるふふりよりふ。このちハ仰生ふふるりふ。ふりー程よ爲朝ハちふふふふ紫ふふんとおぼせーふ。有一日德大寺中納言公能卿を上郷とーて外記。仰ふふ宣旨を下されふるその文よ。

源爲朝久住宰府忽緒朝憲咸背綸言梟惡頻聞
狼藉尤甚早可令禁進其身依宣旨執達如件

かくのゞふふ仰下されーふび爲義ふち驚さまひふふ。彼が鎮西よありふふ武威を逞ーふせーハ國司の墮弱酷吏の非義を誡ふるまゞのゐふふ。朝家ハ

叛きをきりしふもあふぐ。此度の忠勤ゑ恩賞ハなくしもかゝる仰を蒙りて
こゝ涙をながねとつゞまさるひしぐ。鳥朝ハ驕さゝる事なもなく。こゝ是信
西がゐを知なり。豫くゝ思設つゝるゆよりて。ふく引籠居くゝ罪をすゝ
めふ。主上の御惱劇く在ん故ゆや。こゝ伊の制度もなく。七月廿三日
ゑ至くゝ。近衛院終ゑ崩ゑ給ひぬ。聖算十七歳くゝ上皇鳥羽帝
女院美福門院の御歎ここハ更ゑあぐるべきもあふぐ。只新院崇徳帝のこゝ
ゆゑ。ゆゑ位ゑ復つゞくも。一の宮重仁親王崇徳院第一の皇子を位ゑ即せ
めふくぬといく頼くおぼしくゝふ。さハるくゝ美福門院の御ふ
ふ。後白河院諱ハ雅仁との時ハ四の宮ゝておこゝふゑくゝ生せをあゞて位
ゑ即ゆゝふせゆふ。これ全く近衛院世を早くせゝゆゝハ新院の呪詛
しゆふゝと思食く。法皇鳥羽帝ゆゝ云そうゆゝ。かくいそうゆゝ

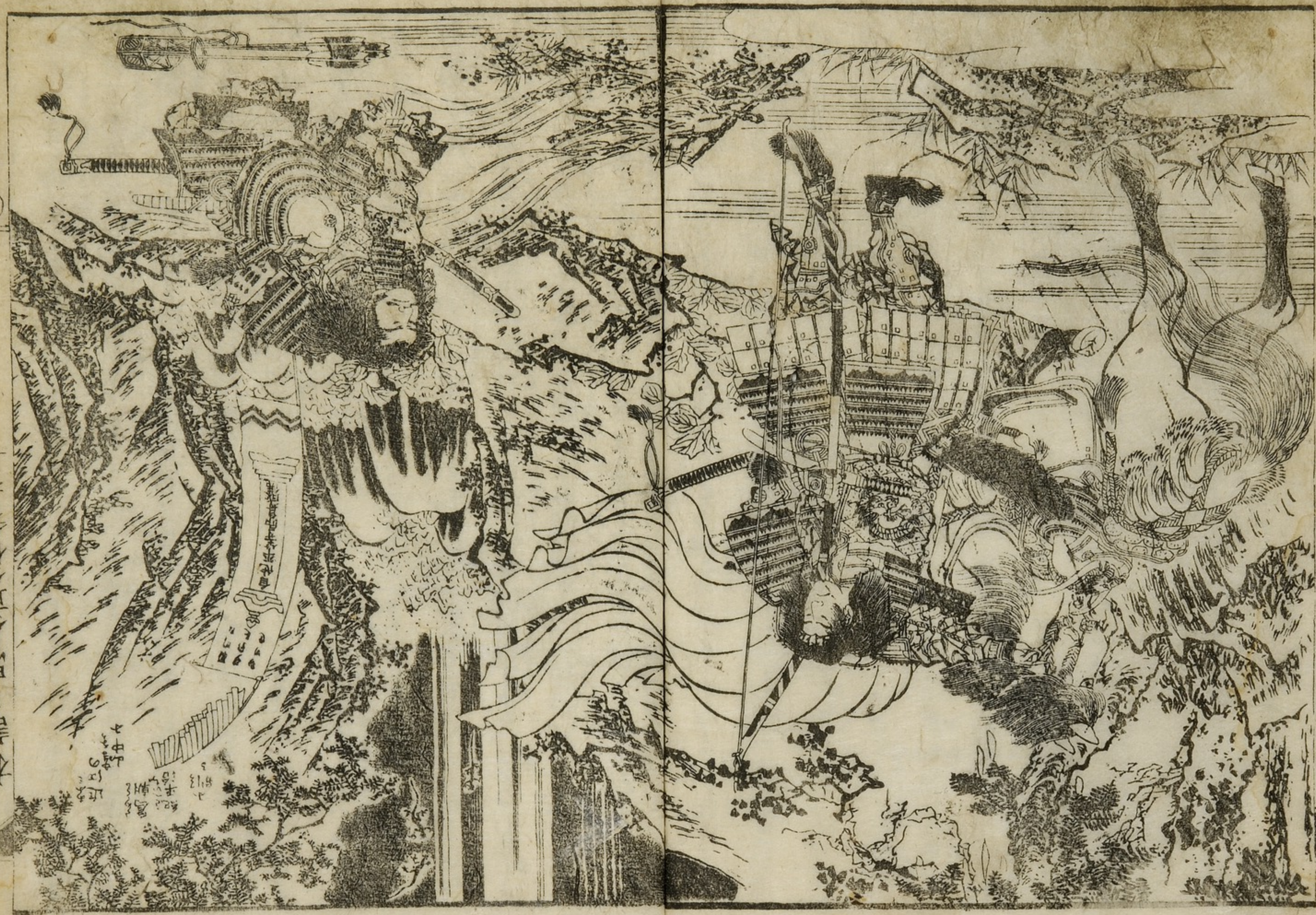
るゆん。これゑよりくゝ新院の御恨いよくゝふくゝ。さハ涼暗即
位ゑ今茲もくれくゝあるゑハ久壽ゝ年四月九日ゑ保元と改えあり
くゝ。是より先太宰府ゑハ鳥朝久くゝ六條堀河の館ゑ押籠られく
在ゝるゝゆえ。世ゑ喪人今さゝふふもも驚ゝ。されハそゞめよりゆゝ
ゆあゝびゝゝ。ひつくゝいひ罵り。周章大ゝるゝゞれハ白縫もそゝよな
ゝ抱おゝひのゆゝかゝるくゝ。紀平治ゞ妻ハ代を宰府の天神ゑ代ゝ
ゝせくゝ。今一ゝび夫ゑ遇せゆゝ人と願くてゝくゝる。紫下某生再説。今茲
七月端の二日一院鳥羽法皇崩御去ゆひぬ。去年の秋近衛院さゝく
せゆひくる御歎さのつゝわるゆゝ四月のゝゝゝより御違例ありゝゝえし
が。聖壽いゝゞ六十ゑも満ゆゝ。ゝゝねハいゝ惜くゞゝ御齢ゝ。さる程ゑ
新院ハ豫くゝゝゝくゝの在くゝゝゝの折くゝもゆゝくゝ世の中恩劇

なりぬとて、よりより内裏より、爲義の嫡男下野守義朝を仰せく。東三條の留守をさゝゝぬ。少監物藤原光員を召捕せく。拷問せさ
ゝるゝ。新院の御謀反うたがふるのさよし、ゝゝより。新院もこのゝを聞食
くさて、匿むとも今はかゝとあらじ。まづ武士を召せて勝召ゝ
中ゝも義朝は既に内裏へ召れゝ。彼が父の爲義は召ゝも
應ぜゞゝ。あは館にありと、ゝ。さゝゝ爲義を召せと仰せく。ゝゝ
仰ゝされゝ。爲義かく辞ゝく。得ゝゝ紙ようさねて左京
大夫教長朝臣を六條堀河の館に遣れいと叮嚀に召せゝ
爲義朝臣今は已にをもて四郎左衛門頼賢五郎掃部ゝ頼仲賀茂
六郎爲宗七郎爲成鎮西八郎爲朝源九郎爲仲。ゝ六人のゝを
を將く。白河殿新院のへ走ふる。新院御感斜ゝ。近江國伊庭莊

美濃國青柳莊この二箇所を賜りく。即刑官代に補。上北面ゝ
候ゝ。能登守季長をゝく仰られ鶏九といふ御劔を下され
ゝ。かくく合戦の評議あるに鎮西八郎爲朝は獅子の丸を縫そる
直垂に八龍といふ鎧に塞。白き唐綾を威せる大荒目の鎧被て三
尺五すの太刀に熊皮の尻鞘入て五石の弓の長七尺五すあるく打
ゝに三十六指る黒羽の矢を負兜を負郎等に持せく大床に坐
ゝ形勢勇ハ樊噲にもまさり。智は陣平にも超。弓は元来養由基
にも恥べくぞ。天晴勇くしく大將やと人ゝる只顧稱讃して。新院も母
屋の御簾を綻くく獻覽あり。彼が五年あり以前に式成則貫が矢
をとりゝる時よりは才丈も一段高くこゝゝるぞ。寔に一騎當千とゝゝれ
ものをいふくく。御感ふかくおはしますべし。百戦百勝の良策あるべ

と仰下されしく爲朝うけまろり。機ふ臨と変よ應じ。敵を一時よ拉ぐの謀を獻ふ。聖運の傾くふ。左府頼長公これを拒く用ひまらず。只徒ふ敵の寄せを待る程よ。十一日の曉ふ清盛義朝を大將とし數千騎の官軍押寄ふ。既ふ詰の合戦よ及ぶ。爲朝を鎮西より召俱る。九八騎の郎等を前後左右よ從く。真先よ馬を乗わ。只一戦よ清盛の大軍を追ちし兄義朝の兜の星を射削く膳を冷せ。ちぐ勝よ乗るといへども。あ月同ふあまる大軍あれ八終ふ新院方うち負く。官軍火よ乱よ入り忽地ふ火を放しふ新院を東の門より出御ありて北白河を投く落まふ御方の軍兵八これをえちまるといへども。猛火ふ隔られ煙ふ咽び。供奉をまるまうでる四落八落ふ落行る。この時爲朝の九八騎のこ一歩も退うで奮撃突戦く新院を

落まるせ。終ふ太刀折よ勢力究まる。高間二郎八金子十郎よ討よ取ふ二八仙波七郎ふ組討せよ惡七別當八弁慶實盛よ首を授く。あ月このみ月も大矢新三郎。越矢源太松浦次郎ふ取ふ三郎ふ紀八をそ。ものこる悪く討死しふ八町礫紀平治八いまぐ薄痍一箇所も負ず主まるもよ踏とどまり防ぎ戦ふを爲朝ふ。今八君も父も遥ふ落伸まひつる。いろまぐかあるべきいで御蹟を暴ひまわぐせんとて。ものこる屠ふさまを逐ひそぐやんとする敵あぐれば。既よ行延まひしぐ。又馬を馳くく上矢の鏑只一條のこれを世の人ふ又ものやくまばく。寶莊嚴院の門の柱ふ彫と射くるまふ抑爲朝この軍ふ二十四差る矢二腰。十八差る矢三腰十六差る矢三腰を負ひしよこのうち義朝の兜の星を射削ると大場景能が膝



節を射切るると二條あるべし化矢なり或は一條は二騎三騎射つ
めさせ或は近づく敵をば引よせ〳〵首を搦切撥掬て投こゝ〳〵まひめれども夫
厦の將ふ壞るとなるとは。よく一木の柱べきふあるべしれば。公の対は敗北
一終は落人とありまつとそせしもなさかく〳〵鳥朝は近江を投て落
まつふ白河の山中あく〳〵まで一馬を駐め紀平治は宜つ〳〵恨〳〵くて
頼長公。は謀を用ひまつて居るべふ敵をきちんれべこそ忽地軍敗は
く君父の往方をゞは考へねさとて直ふ自害もべきふあるべきそれ
は父は尋逢まつるせ〳〵世の光景をもうんとそつも汝はこゝより筑紫へ
立ゝ〳〵忠國白縫あよこのゆを告よ〳〵と宜へ紀平治ゆもあへぞ。
こは思ひもうけぬゆをうけまつりいりのうゆ七騎の朋輩ふも後はこれ
〳〵付添まつるせ〳〵は先途をこゝけまらん鳥なり。いうる仰さるゝを

立も去じといふ鳥朝又宣ふゆ汝が誠忠はつれよく〳〵去りぬ去れども
この軍敗は〳〵鳥朝もしゆ〳〵へるべなりとゆえば菊池原田が徒時
をもく〳〵不意は押寄セヨ手の塾懐をもふさんとせでやあるべきさるを
鎮西なる氏族外戚このゆを考へ〳〵ところの外は狼狽し忽地擒
とあり〳〵生恥を曝らとうゆもあんふ下ふ朽をしるべ。とく
汝は彼処ふ走うり〳〵忠國ふ力を戮せ脱るべ〳〵迎はり〳〵るべ。
り〳〵も討死せよ鳥朝が生前の心うとれのこなりと言を竭
〳〵諭へ紀平治や〳〵兼引〳〵。考へ仰は従ひまつり宰府は走
下り〳〵やがて合戦し。りるべは忠國白縫の由倶〳〵便宜れ
地は潜せまつるを時をまち〳〵再會を計てのべ。君は又よく艱苦を忍ひて
性命を保あらんゆこそねがへられ。とゆせ〳〵鳥朝莞爾とゆ〳〵て手

懈るとて。汝女こゝに別を惜こ落人の物具ふ用をうく孔山法師なん
どゝ文られそ人の怪ぬ間ふとゝ仰をれば。紀平治今へせんもゝぐおくて舊
の路へ立くり爲朝ハ馬をゝゆめ。滋賀のうゝ人起こさまゝて。

椿説弓張月前篇巻之三　畢

參考册

撥雲五篇